

釣り針ペリットを吐き出したオオミズナギドリの報告

伊藤恵美* 森重京子*

はじめに

オオミズナギドリ (*Calonectris leucomelas*) はミズナギドリ科オオミズナギドリ属の外洋性の海鳥である(平凡社 1996)。神奈川県自然環境保全センター(以下、センター)には、傷病鳥獣の保護を始めた1978年から現在2002年12月までに、計49羽のオオミズナギドリが収容されてきた。

鳥類は、その種類によっては餌として食べたものの不消化部分を、ペリットと呼ばれる塊にして吐き出す習性がある。魚食性の鳥では、魚の骨をペリットとして吐き出すことがあるが、本稿で報告するオオミズナギドリは、いくつかの釣り針からなる塊をペリット(40mm×31mm、2.3g)として吐き出したものである。希少な事例として、ここに報告する。

オオミズナギドリの経緯

本鳥は2002年9月4日、受付番号020703としてセンターに収容された。茅ヶ崎市内に在住の県民の方が、茅ヶ崎市浜須賀の海岸でうずくまっているところを発見、保護しその当日にセンターに搬送したものである。搬送時の体重は450gで消瘦傾向にあった。

左眼瞼が軽い浮腫様を呈し頻繁に閉じるため、左体側から何かに衝突して地上に落下、飛び立てずにいる

ところを保護されたものと思われた。

体力に多少不安は残ったものの、外洋性海鳥を長くケージに収容することのリスクを考慮、また外傷も認められなかったため2002年9月8日、平塚市千石河岸の漁港付近にて放鳥を試みた。しかし、5日間の収容期間中にすでに汚れが着くなどして羽毛の状態も悪くなり、飛び立つには至らなかったため、回収して再びセンターに収容した。

センターでは水鳥に対するリハビリテーションの設



写真2 オオミズナギドリが吐いた釣り針ペリット



写真1 釣り針ペリットを吐いたオオミズナギドリ
(2002年9月24日撮影)

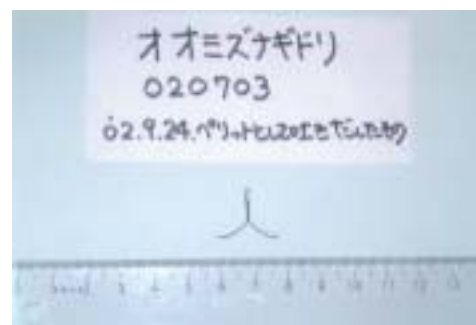


写真3 ペリットを構成していた釣り針

備、技術が十分とはいえないため、ビタミン剤を添加した餌の給餌によって、体力の回復をはかるに努めるほかなかった。羽の状態を改善させることができないまま時間が経過していた2002年9月24日朝、釣り針からなる塊をペリットとして吐き出した(写真1,2,3)。

この時点で、センターではこれ以上の改善は望めないこと、また異物であった釣り針ペリットを吐いたことで体力の回復に期待が持てると判断した。そこで水鳥救護実績が豊富であり、NPO法人野生動物救護獣医師会(WRV)に所属する、野生動物ボランティアセンター(神奈川県川崎市中原区)の馬場国敏獣医師に本鳥を移管し、積極的なリハビリテーションの実施を検討した。WRV事務局の皆川康雄氏を通じて移管を依頼、2002年9月25日に移管するに至った。

その後、野生動物ボランティアセンターからは、リハビリテーションを終え2002年10月6日、神奈川県三浦市の半島より無事に放鳥したとの連絡をいただいた。

おわりに

傷病鳥として保護された外洋性の海鳥は、ケージに収容しておける限界は10日である、と一般的に言われているように、体力回復のためとはいえ、収容が1日でも延びれば延びるほど逆にリスクを背負うことにもなる、という矛盾を抱えている。リスクの中でもまずセンターで問題となるのが、給餌や排泄物による羽毛の汚れ、体重の負荷を受けつづけたために生じる脚の障害である。それらにより、結局は死んでしまうこ

とが多い。

本稿にて報告したオオミズナギドリも、最初の放鳥に失敗し、その後もセンターで収容を続ける間に、さらに羽毛の状態は悪くなっていった。しかし本鳥は、食欲にむらがあったものの、用意した餌をすべて食べ、足の障害も起きなかったことから、移管されるまでの17日間を生きることができたのかもしれない。

ペリットとして吐き出された釣り針は、その形状の特徴からアユ釣り用と思われる。釣り針を放置する、テグスを捨てるといった、釣り人のマナーの悪さからさまざまな野鳥が被害を受ける例は、以前から各地で報告されてはきたが、外洋性の鳥であるオオミズナギドリが、アユ用の釣り針を飲んでいたのには驚かされた。川に捨てられた釣り針が海へと流れ、餌となるような魚を介して本鳥に取り込まれたのであろうか。そうであるとする、河川に捨てられた釣り針は、その近辺に生息する野鳥のみならず、海を生活の場とする生き物たちにも影響を与えていることになる。

ウミガメがビニール袋を餌のクラゲと間違えて食べてしまうということも然り、人間の作ったものが、生きものに対して自然に対して、思いもよらない事態を招くことがある、ということを真摯に受け止めていきたいものである。傷病鳥という枠内の現症以上に本稿の事例は、我々に大きな問題を提示していることを見逃してはならないだろう。

引用文献

平凡社 (1996): 日本動物大百科3 鳥類 : 21-25, 東京